

南 方（ニューギニア）

ニューギニア第四航空情報連隊

埼玉県 井上 勝三郎

「井上さんは航空関係の部隊とのことですがニューギニア生き残りで、随分苦労されたと聞かまして、貴重な体験をお伺いにまいりました。何年徴集兵でしたか。

私は秩父の吉田町で、大正十一年十月二十日に生まれました。男四人、女三人の七人兄弟の三男でした。家では男全員兵隊へ行き、出征兵士の家として表彰されたのです。

徴集年次は昭和十七年、第二乙種でした。ところが、

現役兵より一ヵ月以上早い昭和十七年十二月一日、召集されたのです。私が出征したため、家では男は空になったので、姉が家のことをやり、嫁にも行けなかつたわけです。

静岡県の磐田の部隊へ入隊と決まって、私は一瞬、全身が引締まる思いで「自分も死をかけなければならぬ」と決意しました。

出征の時の状況ですが、その朝、花火が一発上がり、これを合図に神社に参集、私が代表で出発の挨拶をして、後をお願いしますと言って駅まで行進しました。

部隊は無線通信の部隊でしたので、本職は無線、歩兵の一般訓練は一日一時間ぐらいで、モールス信号のキーを叩くことが中心でした。三月になり、三泊四日の外泊許可があり喜んで家へ帰った。しかし、帰隊し

たらその晩全員集合がかかり、転属命令が発せられました。何処へ行くのか、南方らしい、真第九三〇二部隊だけは判りました。

―何時頃、何処から出発したのですか、いずれにしても船での出発でしょうか、その間の航海はもう相当酷しかったです。

昭和十八年三月末、非常呼集で完全武装して駅に向かった。貨車は牛馬と隣り合わせで、隠密にして宇品港へ着く。船に乗って、初めて輸送船と判った。船は蚕棚式の船倉だから、出港してパラオ島へ着くまでの航海中は熱い蒸風呂のようなものでした。パラオは一週間ぐらい停泊したのだが、船の鉄板に南洋の太陽が当るのだから、暑いこと、私等何人かは我慢出来ず、海へ入って泳いで大目玉を食ったが、船のスクリューにつかまり、その大きいのに驚きました。その後、泳げる者は海に入って良いとなり、暑さをしのぐことが出来たのです。

再び船団を組んでラバウルに向け出発ですが先頭に駆潜艇、後には駆逐艦で六隻の船団でした。前に出航

した船団はやられたが、我々は無疵でラバウルに上陸出来た。ラバウルには休火山があり噴火口の穴に無線機があって、日本艦船が入ると、通信されてやられたということでした。ラバウルで始めて土人を見たが茶黒い体、頭の髪は縮れて短く、目ばかり光っている。ここに約一ヵ月いてラバウル港を出港した。

翌朝、朝食時間に潜水艦の雷撃に会う。その時私は対潜監視についていたのですが、眼前で輸送船が撃沈されるのを見た。マストの三倍位の水柱が上がる。船首の方から傾き始めると、見る見る数分間でマストが横に向いてしまった。と思っていると、あの大きな船は逆立ちして、またたく間にスーッと見えなくなりました。

（井上氏は僚船の戦友が哀れだと涙を拭きながら、声をつまらせた。）

駆逐艦も駆潜艇も物凄い早さで飛ばしていく。残った五隻の船はバラバラに離れて、一隻づつに避難行動した。幾日かたってやっと船団を組んで、駆逐艦、駆潜艇に守られながら、昭和十八年四、五月頃か、ニュ

ーギニアのウエワクに上陸、そこで第四航空情報連隊
第二中隊に配属になった。

ウエワクでは空襲の中、炊事当番になった。炊事は
進級が遅れるといわれていたので、食料難の中、サク
サクという木の幹の芯でうどんを作るのに苦労した。
空襲の最中の炊事ですので、煙が見えれば直ぐ飛行機
に銃撃されるから水を掛けて消す。飛行機が行ってし
まえばまた火を付けて炊事を始める。中隊は約一五〇
人だから一日かかって作り皆に喜ばれた。そんなこと
があつて、私も隊長から功労を認められ、そのためか
進級も早かつた。

ー情報連隊というのはどういう任務があるのです
か、井上さんはその後どうされたのですか。

今度は、アテンブルに、無線一個分隊の展開命令だ、
私もその一員に入っていた。情報無線機を準備して、
ウエワクから大発でラム河口へ入り、低空飛行で銃
撃を何回となくやられる。私も銃撃を食いドラム缶の
陰に隠れた。夢中だったが、ドラム缶の中は油なのだ
から、銃弾が当れば爆発したろう。

ラム河を上がるのは、昼はやられるので夜になって
行動する。日中は樹の下にかくれ、夕方になって出発
するので、一日たいして上がれない。一個分隊は八名、
私は三号無線機や転把を運搬するので重い。

一週間ぐらいかかってラム河の一番上流の目的地ア
テンブルに到着した。分隊長は石川県出身で歩兵から
転科した勝木曹長だった。

早速、点検、通信用意だ。アンテンブルは、教会堂
もある立派な所だった。教会の脇にコ型の防空壕を作
って、そこに無線機を置いたのです。コの字型にしな
いと爆風がぬけないからです。

無線機で発信すると間も無く敵機に見付かつて、ボ
カボカ爆撃を喰う。電波は敵に逆探知されているらし
い。我々は毎日「大編隊来襲」の暗号を組んで送信す
るのだが、空はB29の編隊で真っ黒となる。このまま
ではやられてしまうので、ジャングルの中に入り、太
い木の頂上にアンテナを張る。現地人に木を運ばせて
家を作った。床の上に天幕を敷いて寝るのだが、無線
機は蚊張の中へ入れ、毎日ウエワク向け送信する。す

ると、ウエワクの基地から飛行機を発進させて、敵の編隊を迎撃する。

我々の無線班は歩兵より前に出て、良い情報を早く取るためのラム河上流の最前線への展開でした。ですから、対空監視は木の櫓を組んで、カモフラージュして双眼鏡で見ているのだが、現地人の方が耳が良い「バルス・カム」と叫んで我々より早く敵機来襲を知る。カンが良いというのか、ジャンゲルの小路へ人が入ったことを、しかも、男か女か、草の倒れ具合で判るといふ。

そのうち、現地人とも仲良くなり、古禰をやつても喜んで鉢巻にしたり、禰にしたりです。我々を「ブラザー」（兄弟）といつて、我々の食事が終わると、現地のタバコをくれたりする。肉を持って来てくれることもある。豚の両足を縛つて棒に担いで持つて来てくれたこともある。豚一頭は結婚の結納ぐらゐの価値があると聞いていた。

アテンブルでの空襲はますます激しくなり、そのうちにウエワクに撤退する命令が出た。無線機は河へ捨

て、暗号書を処分してラム河を現地人のカヌーを使って下るより仕方がない。夕方から夜にかけて下らないと空襲でやられる。丸木のカヌーだから我々ではうまく漕げないので現地人に夜漕がすのだが、一人、二人と途中で逃げてしまう。その後は情勢が悪くなつて現地人はもう来なくなつてしまった。

その後はいたし方なく兵隊が漕いだが、なかなかうまく河下りが出来ない。最後は歩いてウエワクに着いた。集結を試みたら「アイタベ作戦」に参加する命令が下つていた。我々はアイタベへ向かつて進んでいったが、途中アイタベからウエワクに撤退する歩兵に会つた。兵器も持たず乞食同然の姿だつた。その兵隊が「何処へ行くのか」と言うので「アイタベへ行く」といふと、「行けば死ぬ」と言う。

当時、アイタベには敵が上陸していたといふので、ウエワクへ戻つたら、我々の隊の米はアイタベに行かねば受領出来ないという。行けば死なねばならないので米泥棒するより仕方がない。しかし、糧秣所には日本兵が銃を持って警戒して取りに行けないので、空襲の

時に米を盗りに行く。空襲になれば歩兵は防空壕の中に退避してしまう。その隙をねらって行くのだが、機銃掃射で、バリバリ、ビューン、ビューンとやられ命がけで米の麻袋を背負って倒れながら安全なジャングルに逃げ込む。

そんな生活だから、軍隊ではなく個人主義の集まりになってしまふ、自分の米は自分で取って来なければならぬ。自分は自分で食べるしかない。

そのうち米ばかりでなく乾パンを取りに行き、中の金平糖だけ取って食べようと、段々怒が出て来る。しかし空襲の合間に命がけで取るのだから、上官も兵隊もない、自分自身だけでやる。

そのうちに、これも永續き出来ず、山に逃げ込まねばウエワクに居られない。これで米とお別れだといふので、米一斗と塩を持ったが、これが命の綱だ。怒の深い人は缶詰などを持ったが、その人たちは疲れて早く死んでしまった。

それから奥山に入り、その塩だけで一年半過ごした。塩は大切なので箸の先に付けて舐めるだけ。塩がなく

なり、海岸へ取りに行った戦友は誰も帰って来なかった。食糧は現地のバナナを焼いて食べたり、トカゲ、ねずみ、へび、ジャングルの草、食べられるものは何でも食べた。こんな生活の中、爆撃・銃撃・夜襲・マリリアとの戦いであった。気の弱い兵隊は口に銃口をくわえて引鉄を引いて死んでいった。

奥山に行く途中、一〇メートルに一人ぐらい死体のある中を歩いていったが、戦友の木本が落後して「もう駄目だ、歩けないから此処へ置いていってくれ」と動かない。私は泥地の中を、木本の銃と背のうを担ってやって連れて歩いた。そのため彼は助かって今は元気で千葉に住んでいる。

長いこと湿地帯にいて、月夜の撤退、防毒面のマスクに火を付けてたいまつにしながら撤退や、暑さと、大腸カタルのため身体は細くなるばかり。そのうち現地人の物を盗りに行くところ矢や槍で殺されるようになった。槍先には毒が塗ってあるらしい。戦友の木本も槍先が体に入ったまま終戦までいたが、復員の時に豪州兵に手当てをもらった。

私自身もこのような状況で、今度死ぬのは自分か、と何回も思っていたが、敵の攻撃も厳しく、最後の斬込隊に選ばれた。手榴弾一発を持って出発したら翌日停戦命令が出て一命を取りとめた。前日行った人は戦死したのだから、紙一重のところでも命が助かったわけです。

飛行機が低空で来ても何もしない。おかしいと思った。前のように銃爆撃しないので、世の中が変わったのかと思った。終戦だからそうなったことがピンと来なかった。それからウエワクへ集結したら、背のうの物を出させ、兵器はテーブルの上に置かされ一列に並べられた。ポケットをさぐられ、手を上に挙げさせられた。これで降参かとなりました。

その後使役に使われたが、その時は食糧が充分でなかった。米軍人のベットの下の煙草の吸いながらを拾おうとすると、拾うなという。肉は脂の所が捨ててある。それを拾って皆でかじり回した。糞燃やしもさせられた。

そのうちに日本へ帰る船が来るというが、日本では

なくアメリカへ連れて行かれるかと思ったです。日本の船が来たが、船員の顔は色白く綺麗に見えたので、これは日本人かと疑ったが、話しをしたら日本人とはつきり判った。

ニューギニアから帰るまで死ねなかったのは日本の飯を食いたい一心だった。食ったら死んでもいいと思った。浦賀に上陸して、戦友と炊事場よりバックに一個飯を盗んで飯を飯盒一杯にして食べたが、その晩腹がブツブツして眠れなかった。

ーニューギニアでは大変苦労をしたわけですが、今思い出すことを少し話をして下さい。

凄いのは空襲でした。空が真っ黒になる程の飛行機で、あの音は今も忘れられない。敵機は目標目がけて真っ直に行き、帰りに、こちらの無線で場所が判るのが銃撃して来る。無線傍受はこちらもした。敵機から「マウンテン、マウンテン……」と生の声を聞いたこともある。また、ピラを撒いて「チョコレートとガムをかんで撤退して下さい」ということもあった。

また、敵が襲撃して来てわずかなことで助かったこ

ともある。日本軍は床の上で寝ているだろうと、地面より高い所を自動小銃で射って来たが、我々の寝ている上を弾が、かすめていった。その時、前の勤務の不寝番はやられ、私は次の番だったので助かった。帰る時、ある指揮官は「百人に一人の生き残りだから、大切に生命を持って帰るよう」と言ってくれた。

復員は昭和二十一年一月二十一日でした。

浦賀より本籍地に帰る際、電車乗換階段がきつく、足を引き上げながらでした。何しろ一年半以上米を食っておらず、栄養失調で骨と皮でした。電車に乗っても誰一人席を譲ってくれることもない。一年以上ひげも髪の毛も伸びたままでしたから乞食同様ですので、逃げたいくらいでしたね。

やっこのこと生家にたどりついて、一番先に見たのは仏壇でした。足かけ五年、実役三年二か月の間、何んの連絡もしなかったのですから位牌があるのではないかと思いましたよ。

母親と姉達は早速私の衣服を、お湯に通して殺菌し、ダニ、シラミ殺しをしたのです。それより一年三か月

は体の回復に費して、昭和二十六年より現在地に、時計、眼鏡、宝石店を開業したのです。

昭和五十四年より息子が家業をついでくれることになり、「おやじ、好きなことをやってくれ」と言われたので、早速、町内の画家の指導を得ながら好きな油絵に取り組むこととしました。以来、十数年、ようやく絵になってきました。

昨年十月にはニューギニア体験記（敗残の記憶）展第五回個展を開催しました。早速毎日新聞の記者の方が来宅され、毎日新聞埼玉版に掲載され、また戦友、恩欠者の方々の参観もいただきました。まだ、頭の中には当時の記憶が多く残っており、「二度とあってはならない戦争の悲惨さ」を作品に残し、薄れつつある戦争の残酷さを訴え続けたいと思っております。

お陰様で現在も写生旅行をしながら、アトリエに定時出勤し、夕刻には茶室に戻るといって毎日、次の出品作品にと頑張っています。

【解 説】

航空情報連隊の井上さんの部分的な行動と労苦は判

つたが、編成は次の通りである。

第四航空情報連隊（総員約八二五名）

連隊本部（本部・経理部・衛生部約二三名）

第一、第二、第三中隊（三個小隊、一個小隊、四個分隊約二〇〇名）

警戒第一中隊（約一六〇名）、警戒第二中隊（ホーラ

ンジャーに建設予定中、昭和十九年四月二十二日敵

上陸のため中止、兵器、要員は輸送中行方不明（先着者一部、約十名） 材料廠（約十名）

第一中隊（昭和十七年十一月二十七日編成、主要兵器

対空二号無線機、戦闘参加地域―ニューブリテン島、

東部ニューギニア、西部ニューギニア）

第二中隊（編成・兵器第一中隊に同じ、戦闘参加地域

―ソロモン群島、東部ニューギニア、西部ニューギニア）

第三中隊（編成十八年四月二十七日、主要兵器第二中

隊に同じ、戦闘参加地域―ニューブリテン島、東部

ニューギニア、西部ニューギニア）

警戒第一中隊（編成十八年三月五日、超短波警戒機（固

定移動） 戦闘参加地域―ウエワーク、アンゴラム）

終戦時、ラバウル・ウエワーク（ムッシュュ島）・サル

ミの三地区に集結、

(一) ラバウル地区は昭和二十一年四月、名古屋上陸、復員

(二) ウエワーク地区主力は一月二十五日、浦賀上

陸、復員

(三) サルミ地区は六月、名古屋に上陸、復員。

西部ニューギニア 飢餓との闘い

奈良県 大森捨夫

―大森さんは郡山生まれですか、何年徴集ですか。

私は大正十一年十一月六日に、この郡山市で生れ、

昭和十七年徴集で第二乙、昭和十八年八月召集され、

兵庫県加古川の防空隊に入隊したのです。一期三ヵ月

間、高射砲の教育を受け、引き続き臨時召集され明石

の川崎航空の警備について、陣地を作った。自分は第